忍法伝　第10回

作・佐々木守　　え・岡本颯子

第六章　八雲たつ……

（一）

「広いな……」
ボソリと弓月はつぶやいた。
弓月はいま近江国、琵琶湖の岸に立っているのだ。
「おれが修業した熊野灘くらいに広い……」
しかし、熊野灘の荒波とちがって、ここ琵琶湖の水は、ただ静かに、岸の葦の間にさざ波をたてているだけである。
ふと、弓月は、死んだ父の、忍者「鳥」を想った。熊野山中で、そして熊野灘のうちよせる岩頭で、おれは父から忍びの術をならった……、それはついきのうのことのように思える。が、いま弓月は、山背大兄王の子の使いとして、はるか北の国、能等（現在の石川県・能登半島）へ行こうとしているのだ。
そこにあるという幻の兵団、能等軍団の力をかりるために……。
六四三年、蘇我入鹿は、斑鳩宮に聖徳太子の子・山背大兄王子を攻めた。王子は命からがら生駒山中ににげこんだが、そこで、はじめて、能等軍団のことをいい出したのだ。
果たして、それは実際にあるのか、またあったとしても、本当に大和朝廷のために働く軍団なのか、それはわからぬ。
しかし、弓月は、いま、その軍団を訪ねて能登国へ向かっているのだ。

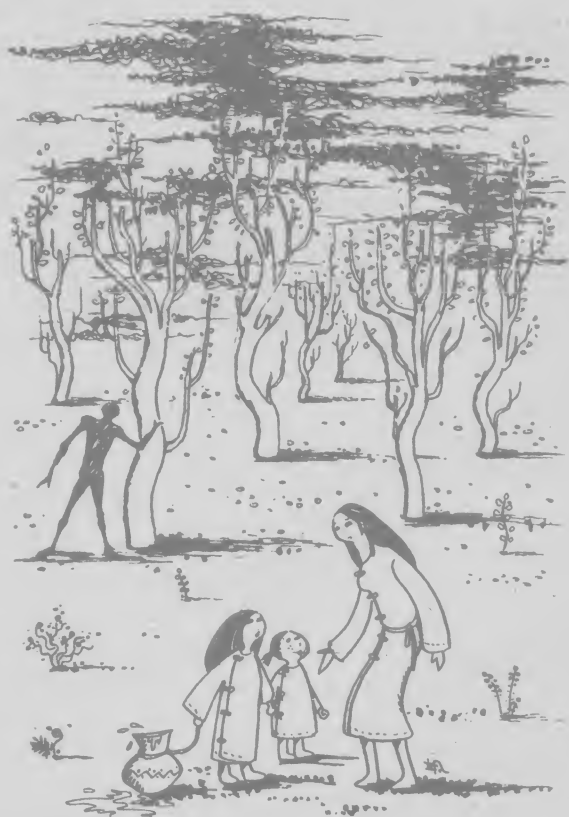
「八雲たつ
出雲　白雲　海にたつ
…………」

突然、子どもの声がひびいた。
はっとして弓月はふりかえった。
八つほどの姉娘と、五つくらいの弟がうたいながら、大きな土器をかかえて近づいてくるところであった。
おそらく、この湖へ水をくみにでも来たのであろうか。
姉弟は、うたいながら近づく。

「八雲たつ
出雲　白雲　海にたつ
七重　地の雲
八重　天の雲
…………」

やはり二人は水をくみに来たのであった。
岸までくると、二人はうたいながら大きな土器を水にしずめて、うたいつづけた。
おかしいな……。
弓月は眉をひそめた。
あの二人は、たしか「出雲」といってるぞ。
出雲とは、もっと南の国の名ではないか。それが、どうして、ここの子どもたちがうたっているのだ？
弓月は、二、三歩、子どもたちの方へ近づこうとした。
と、いきなり、後の林の中から、長い叫び声がおこった。
「ホオーッ」
と、その声はきこえた。女の声であった。

日本

とたん、姉弟ははっとしたように立ちあがった。
林の中から、髪をふりみだして、一人の女がはしり出して来た。
「やめろ!」
走りながら、女は叫んだ。
「母ちゃん……」
弟は女に向かってよびかけた。
「バカ、やめるんだ」
女は、おそろしい顔で姉弟をにらんだ。
「そんなうた、うたっちゃいけないって、いってるだろう」
「だけどさあ……」
弟は、不満そうに何かいいかけたが、姉はその弟の口をふさいだ。
「わかったよ、もう二度とうたわないわ」
姉は、そういうと、水にしずめた土器のかめを、ヨイショともち上げた。
「さ、早よう、かえるんじゃ」
母親は、一度だけ、ジロリと弓月をみると、何かこわいものでもみたかのように幼い姉弟をせきたてて、林の中へかえろうとした。
「待て!」
弓月は、思わず声をかけた。
母親は、どきりとしたように、足をとめると二人の子どもたちをしっかりとこわきにかかえた。それは、まるで、恐ろしい敵に出会ったかのように見えた。
弓月は、ゆっくりと近づくと、つとめておちついた声で話しかけた。
「今、この子たちのうたっていた歌だが、八雲たつというのは、どういう意味かね」
「知らぬ!」
母親は、はげしく首をふった。

「わしらは何も知らぬ、何もきかないでおくれ」
「古くからつたわっている歌なのか?」
「知らぬ、知らぬ、何も知らぬ」
「だが、この琵琶湖のほとりで、八雲たつとは……。八雲たつというのは出雲国(いずものくに)のことだろうが……」
「知らぬ、何も知らぬのじゃ」
いきなり、母親は、二人の子どもの手を、ぐいとひっぱってかけだした。
「まってくれ!」

子どもたちの手から、土器が地面におちた。
土器はこなごなにくだけて、中の水が、みるみるかわいた土にしみこんでいった。
二人の姿は林の中に消えた。
「へんだな……」
弓月は、夕もやの中にただずんで、ボソリとそうつぶやいた。

（二）

その夜、月は美しく琵琶湖の上にかかった。あたりの山も森も闇の中に沈み、空はすみわたり、月の光を反射して、琵琶湖の水はキラキラと金色にさざ波を立てていた。
その、美しいさざ波よせる岸の辺に、見よ、白木で作られた四角い祭壇があるではないか。昼間は見えなかったものだ。
と、すれば、夜と共に持ち出されたものにちがいない。
その白木の祭壇の上に、不思議なものが一つのせられている。高さは一メートル五十センチ余りもあろうか。それはちょうど、お寺のつり鐘を細長くしたような形をしている。
月の光に、それは赤黒く輝いているので、金属の一種、たとえば銅で作られているものであることがわかる。
そのつり鐘のようなものをまつった祭壇の前に、老若男女、七、八十人が集って、大地にひれふし、これを拝んでいるのである。
弓月は、木の梢に、まるでこぶのようにへばりついて、じっとこの奇妙な儀式をみおろしていた。
一刻も早く、能登国へ行かなければならないことは、よくわかっている。しかし、弓月はなぜか、夕方、あの母子のいったことが気にかかってならないのだ。なぜ、こんな近江国で出雲国をほめたたえるうたがうたわれているのか。なぜ、あの母親は、あんなにも、何もしらないと強く否定したのか。
弓月は思い出す。父の忍者「鳥」が死ぬときにいったことばを――。
「鳥」は病いの床に伏しながら、まだ幼なかった弓月を枕もとによんで、こういったのだ。
「今のスメラミコトは、外国から来たのだ。この国の本当のスメラミコトは、昔、出雲国にいた……」
と――。

琵琶湖の水と、それを輝らす月は美しく冴えていた。祭壇のまえにひれふした人々の間に、まるで潮騒のような祈りの言葉がおこった。
「あっ、あれは……」
弓月は、はっとした。
その祈りの言葉は、こう聞こえるではないか。
「八雲たつ……」
出雲　白雲　海にたつ
七重　地の雲
八重　天の雲
…………」
木の梢で、弓月は思わず身をかたくした。と、やがて、一人の老人がすっくと立った。長い白いひげが、胸までたれて、月の光に、美しくゆれた。
老人は、しずかに話した。
「皆の衆、月に祈ろう。水に願い

をこめよう。豊かなる大地に五穀豊饒を祈ろう……。追われ、追われて来た、われら出雲民族が、崩壊し、海へなだれおちた。出雲大社のみこころを、今こそ、月と水と大地に祈るのじゃ」

瞬間！

祭壇にまつられた細長いつり鐘が、シャラン、シャラン、コオオンと、まるで巨大な鈴のように鳴りひびいた。

「何という美しい……」

弓月は、心の底までしびれるような思いにうたれた。

弓月は知らなかったが、細長いつり鐘のようなものこそ、二百年ほど前、日本の国から一斉に姿を消した「銅鐸」だったのである。

「銅鐸」――それは現在にいたるも、歴史学、考古学上の謎とされている。この不思議な鐘状のものが、一体、誰によって、何のためにつくられたのか、現代の学問をもってしても解明されていないのだ。

その「銅鐸」の姿を、いま弓月は梢で見、そしてその妙なる音色をきいているのだ。

銅鐸の音は、なにか弓月のこころにしみとおり、そして幼い日のことを、なくなった母の思い出を、甘くよみがえらせるような、やさしいひびきであった。

弓月は、一瞬、自分が志能便であることを忘れた。

「木の上のお方」

老人の声に、弓月は、はっとした。

「木の上のお方……」

老人はもう一度呼んだ。

見つけられた！と思った瞬間、弓月は木の梢を蹴って一気に大地へとんだ。

見つけられた以上、悪あがきはよそう。それに第一、おれはこの人たちに何のうらみもないし、みたところこの人たちもおれに対して敵意はもっていないようだ。そう思ったからである。

「いずれからこられた……」

「斑鳩の里から……」

悪びれずに、弓月は答えた。

「ほほう、斑鳩の里から、の」

一瞬、弓月は、自分をとりまいた人々の心に、さっと殺気の走るのを感じた。

はっ！としたとたん、その人々を老人が右手をあげておしとどめた。

「いずれへ参られる？」

「うむ……」

弓月は一度人々をみまわした。人々のからだから殺気が消えていた。

「能登国へ……」

「ほほう、能登国へ、の」

同じように老人は答えた。

「今度はこっちから聞く。その銅で作られたものは何だ」

「これか。これは、の……」

「やめなされ！」

とつぜん、一人の男が老人をさえぎった。

「そいつは、ヤマトの奴らに、心を売った男だぞ！」

（なに、おれが心を売った？ それはどういう意味だ？）

ききかえそうとしてやめた。きいたとて、何もわかるまい、と思ったからだ。

弓月は、だまって銅鐸をにらみつけた。

「よい音色の出るものだな」

「うむ、心の底にしみわたるようだろう」

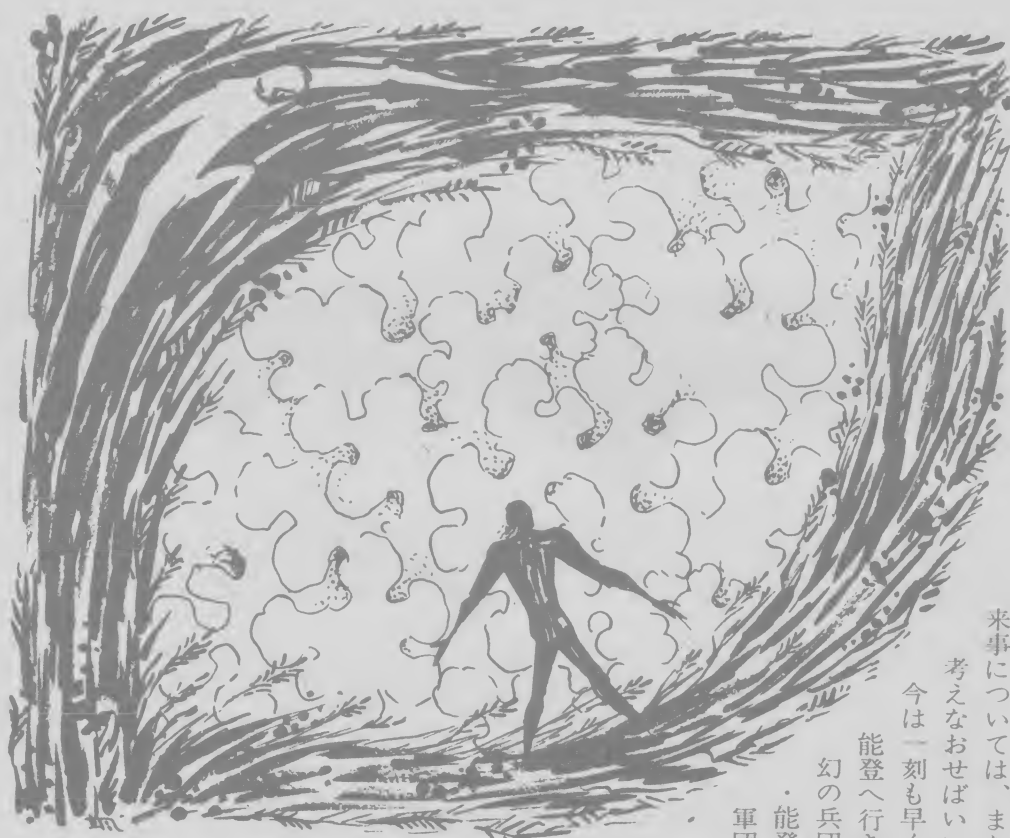
老人は、頬をゆるめて答えた。
そのとき、弓月は気づいた。
銅鐸をまつった祭壇と、琵琶湖の波うちぎわの間に、太い一本の木が立っているのだ。それは、何のへんてつもない大木であったが、いま、はじめてその木の不思議に気づいたのは、その大木の枝が、梢にいたるまで、一本のこらず、とりはらわれて、大木は大地からきえたまま、巨大な棒と化していたからである。
「こ、この木は……?」
「ハハハハハ」
老人は明るく笑って答えた。
「心の御柱じゃよ」
「心の御柱?」
弓月は、あらためて大木を見上げた。一本の枝もないその木は、あたかも、天にある月を一さしする剣の如くそびえているのだ。
「旅の方、一杯いかがですじゃ」
老人は、銅鐸の前にかざってあった酒の入った土器をとり上げた。
「神への酒です。われらと共に、一杯、おふくみなされ」
白い小さいさかづきがくばられ、女たちが酒をついでまわった。
「いただこう」
ぐい！ 弓月はあおった。老人たちもまたのんだ。
月は冴えた。
シャラン、シャラン、コオオン、銅鐸が鳴った。その音色の中で、ぐらり、弓月がよろめいた
「しまった、毒！」
次第に、うすくなる意識の中で、弓月は、老人と、それに唱和する人人の声をきいた。
「我ら、出雲へ帰りたし
　八雲たつ　出雲へ帰りたし」

（三）

ドドオ
ドドオ
割れるようなひびきに、弓月は、うっすらと目をあいた。
しまった！ おれは、いつの間にか、ねむらされて……
はっととびおきる。
と、そこは、すでに、あの美しい琵琶湖のほとりではなかった。
もちろん、銅鐸も「心の御柱」と呼ばれた大木もない。
人もいない。
そこは、ゴツゴツとした巨岩に、日本海の荒波がたたきつける若狭の岸であった。
怒濤は、白い牙で岩をかみ――わき上がるしぶきに、重く暗くたれこめた雲は、すでに冬のはじまりを告げていた。
海は暗く、はてしなくつづいている。
若狭―― 現在の福井県。
その岩頭に立って、弓月はゆうべのことを想いかえす。あの老人とあの人々は一体何者だ。あの銅鐸と心の御柱とは一体何だ。
そして、眠りつつきいたことば――
「われら出雲へ帰りたし、八雲立つ出雲へ帰りたし」
とはどういうことか。
考えながら、いつか弓月は走り出していた。ゆうべは完全におれの失

敗だった。一日分、とりかえさなければならんぞ……。

琵琶湖の岸の不思議な出来事については、また考えなおせばいい。

今は一刻も早く能登へ行き、幻の兵団・能登軍団を加勢にたのまなければならない。

生駒山ににげた山背大兄王子は、いつなんどき蘇我入鹿におそわれるかしれないのだ。

日本海のしめった海岸を、弓月は、鳥のように北へむかって走った。

ふと、天の一角の黒雲がわれて、そこから太陽の光が矢のように、はるか沖合いをてらした。そして、その中で、ムクムクとわき上がるような白雲の幻影が、弓月のまぶたにあらわれてきえた。

（四）

江沼（現在の石川県加賀地方）を通って、一気に能登半島へ入る。若狭から、ここまで海岸づたいに走って、弓月は一人の人間にも一戸の家にも、一すじの煙にも出合わなかった。

あるのはただ、はてしなくつづく砂丘と、そして、しめった土地に、うねるように生い茂る葦の原……。

こんな所に人が住めるのか！

まして、兵団など、あるものか！

だんだん、弓月は、今自分が、まったくむだなことをしているような気がした。

右手に連綿と青くつらなる山々は加賀白山の山脈であった。

弓月は走った。葦のしげみを、砂丘の上を、一散に走った。

ゴオゴオと、昼も夜も休みなく鳴りつづける能登の荒海——。

そのとき、弓月ははっとした。さっきから海鳴りのように聞いていた音の中に、いつか別の音がまじっていることに気づいたのだ。

ゴオゴオ、

ドドオ……。

それは、まぎれもなく、馬の走る音だ。

しかも、それは十騎や二十騎ではない、少くとも五百か六百、いや千ちかい馬の群が、規則正しく走っている音ではないか。

見たこともない一千近い騎馬隊、

これが、能登軍団なのか。

弓月は、葦の茂みに身をふせて、馬蹄の音の方をじっとにらんだ。

しかし、そこは、まだ、うちつづく砂丘のしずかなたたずまいだけしか見えなかった。

つづく